国労はかた

NO.157

2022.6.10

国鉄労働組合博多地区本部
責任者／穴井憲寿
編集者／教宣部
事務所/博多駅東2-18-28
ジェントリー博多201

第15回全国組織強化･拡大経験交流集会

６月６日（月）９：００より、新橋交通ビル地下会議室にて、第１５回全国組織強化・拡大経験交流集会が開催され、九州からは萩原弘司（九州本部）、福崎彰（九州本部）、香田賢晋（博多地区本部）の３名が現地にて参加しました。司会者挨拶（宮崎総務財政部長）、主催者挨拶（松川中央執行委員長）、本部組織部からの提起（鈴木組織部長）を経て、その後５つのグループに分かれて分散会が行われました（写真左）。分散会では国労の「良い所」「悪い所」を各人に上げて貰い、それらについて議論を交わしました。

例）良い所・・・経験豊富な先輩方から多くのことが学べる、個人の考えが尊重される、全国の仲間と会える、東京に行ける等

悪い所・・・若手とベテランとの温度差が大きい、組合内での技術継承が出来ていない、我関せずの組合員が多い、学習会が蔑ろにされている等

その後のエリア報告において、九州からは青年部の福崎がＪＲ九州の異常な実態とそれに対する自身の見解について発言しました（写真中央）。その後、鈴木組織部長による集約、宮崎総務財政部長の閉会の挨拶を経て、最後は恒例の「団結ガンバロー」（写真右）で締めくくりました。

青年のひとりごと

「ミイラ取りがミイラになる」ということわざは、誰もがご存知かと思います。これは、相手を説得しに行ったにもかかわらず、逆に説得されて相手と同意見になってしまうことの例えとしてよく用いられますが、そのメカニズムまでは意外と知られていません。ここで、まず着目すべきは、「相手を説得する」とはどういうことなのかということ。これは簡単に言うと、相手を自分の思い通りに動かして目的を達成しようとすることです。この場合、自分が相手をコントロールしようと働きかけているわけだから、一見すると、主導権は説得する側にあるかのようです。しかし、その「目的」を達成できるかどうかは、当然、相手がこちらの「意図」を受け入れるか否かであり、裏を返せば、自分の「運命」は相手側に握られているということになるわけです。重要なのはここから。社会心理学者のデチャームは、「人間には、自分が自分の行動の源泉でありたい、自分の行動の主人公でありたい」という基本的な欲求があることを強調しています。つまり、自分が自分の行動をコントロール出来ているかどうかの実感が「幸福度」に大きく影響するということ。よって、自分の目的を達成するためには、それに向かって自ら「行動」を起こすことが「幸せ」になるための前提であり、他人の力で自分の「欲求」を満たそうとする姿勢は、必然的に「不幸」を呼び寄せるきっかけにもなります。当然、人は「幸福度」が下がれば「無気力」に陥ります。はじめは、自分の側に取り込もうと「駆け引き」のつもりで相手目線の行動を取っていたのが、手ごたえが感じられないと、次第に、「見捨てられたくない」という依存の姿勢へと変わっていき、最終的には、自分が相手から取り込まれてしまうという喜劇が待ち受けています。もちろん、これは相手側の「自己肯定感」が高い状態にある場合の話ですが、他人を利用しようとするのは、これほどまでに危険な博打とも言えるわけです。

○当面する行動

○　６月１７日（金）１８：３０～/原水禁実行委員会　市教組中部事務所

○　６月２１日（火）１８：３０～/筑紫平和センター定期総会　プラムカルコア